

スポーツ選手が使う「勝ちに行く」の分析

清 水 由貴子

Analysis of the saying “going to win” used by athletes ---

This article considers the expression “going to win”, which is often heard in interviews with athletes, and clarifies the difference between this expression and “going to V” (e.g., going to buy milk), which expresses the purpose of movement. First, I examine numerous examples and identify the formal features of the expression “going to win”. Based on these, I argue that “going to win” means “aggressively going toward the destination of victory”. In addition, I demonstrate that “going to buy milk” and “going to win” are similar in that they represent “moving toward a certain place”. Finally, the former represents moving toward a specific place (such as a convenience store), whereas the latter differs in that it represents movement toward an abstract place called the “destination of victory”.

1. はじめに

本稿では、スポーツ選手のインタビューでよく見聞きする「勝ちに行く」という表現に注目し、従来の「V(=動詞)に行く」との意味や使い方の違いを明らかにする。この表現の多くは、(1)～(3)のように、スポーツ選手や監督のインタビュー記事で見られる¹。

- (1) 「厳しい戦いが予想されたが、打ち合いでは絶対に負けないと思っていた。甲子園ではスタンドも含めて全員で勝ちに行きたい」(2018. 07. 29 野球)
- (2) 西野監督がイレブンに熱い言葉をかけた。「引き分けはならない。勝ちに行くぞ」。(2005. 07. 07 サッカー)
- (3) 秋山監督「(略) また一つずつ。次も勝ちにいく。一戦一戦の積み重ねで日本一を目指す」(2014. 10. 29 野球)

一方、「Vに行く」という表現は、移動の目的を表す場合に使われる。(4)は「牛乳を買うために、コンビニに移動する」という意味である。

- (4) コンビニに牛乳を買いに行きます。(作例)

(1)～(3)と(4)の下線部は、「Vに行く」という同じ形をとっている。(4)の意味から(1)～(3)の意味を推測すると、「勝つために、球場やスタジアムに移動する」ということになるが、その解釈では不自然である。「牛乳を買いに行く」の「行く」も「勝ちに行く」の「行く」も、「(目的を果たすべく)ある所に向かって進む」(『明鏡国語辞典(第二版)』)の意味であると推測されるが、両者の移動先に違いがあると考えられる。「牛乳を買いに行く」では、コンビニやスーパーなどの具体的な移動先が考えられ

¹ 本稿では「読売新聞」の記事を用例として取り上げる。

る。一方、「勝ちに行く」では、選手はどこへ向かうのかと言えば、球場やスタジアムといった具体的な場所ではなく、「勝利」という抽象的な到達点であると考えられる。つまり、「勝ちに行く」の「勝ち」は動詞として解釈するのではなく、「勝つこと」すなわち「勝利」という抽象的な到達点を表す名詞として解釈されるのではないかと考える。

本稿では、多くの実例をもとに「勝ちに行く」の使用実態を調査し、文の形式的な特徴について指摘する。そして、それらを踏まえ「勝ちに行く」の意味を導き出し、従来の「Vに行く」との違いについて明らかにする。

2. 先行研究

まず、移動の目的を表す「～に行く」に関する先行研究を確認する。

前田（1995：457）は、「～シニ行く・来る」の目的節には「基本的に意志的な動作がくる」とし、目的内容は「具体的で意志的に制御できる事態に限られる」と述べている。また「～シニ行く・来る」が使えない場合として、目的節の述語が感覚・感情を表す場合（思う・感じる・知る・恐れる・憎む・慕う・落ち着く）、存在を表す場合（ある・いる・存在する）、受動的な動作の場合（捕まる・助かる・見つかる）などを挙げている（前田1995：457）²。

新屋他（1999：134-135）は、「Aに行く」のA（動詞の連用形あるいは名詞）の意味的制約について、「移動が終わり、移動先でAの動作が開始し、完了すること」と「Aの動作が具体的であること」の2点を指摘している。この両方を満たす以下の（5）は、「Aに行く」と言える。しかし、（6）は日本へ行き、そこで「留学する」という行為が開始するわけではない（「留学する」は母国を離れる時を含んでいる）ため非文となり、（7）は法学部へ行き、そこで「弁護士になる」という行為が完了するわけではないため

² 加えて、目的節に以下の例のように移動動詞（＝帰る）が来ると目的を表さなくなるため、目的節は移動動詞以外の動作になる必要があると指摘している。
（例）帰りに本屋に寄って行こう。（前田（1995:455））

非文となるとしている。また(8)は移動先での動作(=結婚する)が具体的でないため、許容されないとしている³。

- (5) Bさんはスポーツクラブへトレーニングをしに行きます。(新屋他1999:138)
- (6) *留学(し)に日本へ行く。(新屋他1999:134)
- (7) *弁護士になり、法学部へ入学する。(新屋他1999:134)
- (8) *結婚(し)に国へ帰る。(新屋他1999:137)

さらにサ変動詞に関しては、語によって「[[名詞]に行く」は言えるが「[[名詞]しに行く」とは言えないものもあると指摘されている。例えば、「留学に行く」とは言えるが、「留学しに行く」とは言いにくい⁴、ということである。この点に関して新屋他(1999:136)は「明確な規則化をすることはかなり難しく、語彙の意味も複雑にからんでいる」と指摘している。

本稿で取り上げる「勝ちに行く」の「勝つ」は、動作動詞でも、意志的に制御できる事態でもなく、新屋他(1999)が挙げた移動の目的を表す「Vに行く」の動詞の意味的制約からも外れており、「Vに行く」のVには入れられないタイプの動詞である。このような例外的な動詞が「Vに行く」に使われるということは、動詞の意味の変化、あるいは動詞から名詞への転成といった何らかの変化が起こっているのではないかと考えられる。

これに対し、「勝つ」と同じ意味で使われることのある「メダルを取る」は、動作動詞であり、意志的に制御でき、移動の目的を表す「～に行く」の動詞の意味的制約からは外れていない。そのため、文脈によっては以下の(9)のような「牛乳を買いに行く」タイプの文としても、(10)のような「勝ちに行く」タイプの文としても解釈可能である。前者の場合は「取

³ 「結婚する」を「入籍の手続きをする」という具体的な動作に置き換えた「入籍の手続きをしに国へ帰る」であれば、「Aに行く(帰る)」が言える(新屋他1999:135)。

⁴ 「外国へ旅行に行く／*旅行しに行く」、「公園へ散歩に行く／*散歩しに行く」なども同様である。

る」という動作を、後者の場合は「メダルを取る」全体が「勝つ」という意味を表していると考えられる。

(9) 選手控室にメダルを取りに行く。(作例)

(10) この試合、メダルを取りに行く。(作例)

これまで、「勝ちに行く」は移動の目的を表す「Vに行く」の分析対象から外されることもあった。その理由を、新井(2016)は、「勝ちに行く」は「遊びに行く」などと同様に、必ずしも「～するために移動する」ことを表さず語彙化した意味を表す例であるためとしている。しかし、今回取り上げる「勝ちに行く」も「Vに行く」という形を持つ以上、移動の目的を表す「Vに行く」と何らかの意味的なつながりがあると考えられる。また、「勝ちに行く」がなぜ従来の「Vに行く」の解釈とは異なる解釈がされるのかを明らかにするためには、「勝ちに行く」の使用文脈を詳細に確認し、従来の「Vに行く」と比較する必要があると考える。

3. 「勝ちに行く」の文の分析

本節では「勝ちに行く」の使用実態について見ていく。「勝ちに行く」という表現は、スポーツ選手がインタビュー取材の受け答えの際によく使うことから、新聞記事を対象に実例を集めることにする。手順は以下の通りである。

- ①読売新聞データベース「ヨミダス」⁵⁾を利用し、「勝ちに行」と「勝ちにい」で文字列検索をする
- ②不要なものを目視で取り除く

⁵⁾ 読売新聞社が提供するインターネット上での読売新聞記事データベースサービス。(https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/) 検索対象は、1986年～2019年までの全国版と地方版を合わせたデータとする。

⁶⁾ 「勝ちに行く」の使用数は、1986年～1997年は各年20件以下、1998年～2004年は各年約30～40件、2005年以降は各年50件以上と徐々に増加している。

こうして得られた用例は1,668件⁶である。このうち、スポーツ記事からの用例が1,584件（約95%）と多く、野球やサッカーをはじめ、相撲、柔道、水泳、バレーボールなどの様々なスポーツの記事に見られる。スポーツ以外では、選挙（＝（11））や将棋（＝（12））などの記事にも登場する。

- (11) 党執行部は「福田内閣で初の国政選なので勝ちに行く」（伊吹幹事長）と意気込む。（2008. 02. 26 選挙）
- (12) ◇竜王・渡辺明（略）羽生名人の将棋は序盤から終盤まで弱点がありませんから、今回も厳しい勝負を覚悟しています。（中略）全力で勝ちに行きます。（2010. 10. 10 将棋）

以下では、多くの用例から「勝ちに行く」の形式的な特徴を指摘し、「勝ちに行く」の表す意味について分析していく。

3.1 「勝ちに行く」の前文脈

「勝ちに行く」より前の文脈に出てくる「勝ちに行く」にかかる修飾要素を目視で確認していった。このうち、5件以上あったものを表1に示す。

表1 「勝ちに行く」にかかる修飾要素

修飾要素	件数	修飾要素	件数
全力で	135	全部	12
全員で/本気で	89	確実に/必ず	11
みんなで	32	積極的に	10
しっかり	31	やるからには	9
一丸(と/に)になって	27	気を引き締めて/死ぬ気で/ 気持ちを切り替えて/全員野球で	8
一戦一戦/絶対に	23	がむしゃらに/しゃにむに/ 気合を入れて/思い切って/ 死に物狂いで/全力を尽くして	7
とにかく/もちろん	19	泥臭く	6
必死に	15	何としても/どンドン/ 粘り強く/貪欲に	5
なりふり構わず	13		

表1の修飾要素を見ると、「全力で」「全員で」「本気で」の3つが特に多いことがわかる。頻度は下がるが、特徴的なものとして、「一丸となって」「必死に」「なりふり構わず」「がむしゃらに」「死にもの狂いで」「泥臭く」などの副詞も見られる。いずれも「勝つことに執着して」や「相当な努力をして」という意味を表すものである。実際、強い相手に挑む挑戦者側の発言には、以下の(13)の「一丸になって」「全力で」や(14)の「なりふり構わず」などが見られ、「力を合わせ、何としても」という気持ちが見られる。一方、比較的優位な状況にいる監督の発言には、(15)の「しっかり」などが見られ、「油断せず、確実に」という気持ちを強めている。

- (13) 「(略) 初めから負けることは考えない。チーム 一丸になって 全力で 勝ちに行く。(略)」(1999. 06. 17 野球)
- (14) 石田主将(4年, 浪速)は「(略) 悔いを残さないためにも, なりふり構わず 勝ちに行く」と気合を入れる。(2001. 12. 31 アメリカンフットボール)
- (15) 岩淵監督は「総合力で優位と思うので, しっかり 勝ちにいきたい」と意気込んだ。(2018. 09. 13 テニス)

全体的に見ると、「勝ちに行く」は挑戦者側の発話に多い。現時点から相当努力しなければ達成できない、難易度の高い挑戦の場面に使用されやすいようである。

ここで、「勝ちに行く」と「勝ちたい」という表現を、修飾要素の観点から比較してみる。「勝ちたい」を含む文を、「勝ちに行く」と同じく読売新聞のデータからランダムに100例採取した。その結果、「絶対」「必ず」「もちろん」などの修飾要素は両者に共通して多く見られた。一方、「勝ちたい」には共起するが「勝ちに行く」には共起しにくいものに「いつか」「何とか」「一つでも多く」などがあり、逆に「全力で」「必死に」などは「勝ちたい」とは共起しにくいことがわかった。

- (16) いつか、勝ちたい (? 勝ちに行く)。(作例)
 (17) 全力で、勝ちに行く (? 勝ちたい)。(作例)

「勝ちたい」は、「(いつか／何とか／一つでも多く)勝ちたい」といった「勝利の実現に対する願望」を述べており、一方の「勝ちに行く」は、「(全力で／必死に) 勝ちに行く」といった「勝利への向かい方」を述べている点で異なることがわかる。この差には「行く」という語の有無が影響しており、「勝ちに行く」は単に「勝ちたい」気持ちを表しているのではなく「勝利を目指して向かっていく」という意味で使われていると言える。

3. 2 「勝ちに行く」の「行く」の形

次に、「勝ちに行く」の形を見る。圧倒的に多いのは「行く(文末)」(703例)で全体の約42%、次いで「行きたい(文末)」(235例：約14%)、「行くN」(162例：約10%)、「行きます(文末)」(105例：約6%)で、上位4つで全体の70%以上を占める。「行く」「行きます」は意志、「行きたい」は願望を表すが、これら3つに共通するのはテンスが非過去で、試合に向けての意気込みを語る場面で使用されている点である。また、連体修飾「行くN」の例では、(18)の「姿勢」(25件)や(19)の「気持ち」(15件)といった名詞が多く見られる。これらのことから、「勝ちに行く」は、多くの場合、勝利に向かう意志を積極的に表す際に使用されることがわかる。

- (18) 日本代表MF長谷部は「気持ちの高ぶりを感じる。全員がいい守備から攻撃に移る、いつも通りの勝ちに行く姿勢を見せたい」と気迫十分。(2006. 12. 02 サッカー)
 (19) 初日は黒星で「必ず連敗があるから、今日は勝ちに行く気持ちがいつもより高かった」。(1999. 11. 09 相撲)

数としては少ないが、文脈から「勝ちに行く」ことが良いことではないと解釈できる例を見てみる。「勝ちに行かない」のように否定の「ない」が付く例⁷（全4件）と、「勝ちに行ってしまった」と「てしまう」が付く例（全3件）を、それぞれ1例ずつ（20）、（21）に示す。

- (20) 「ガツガツ勝ちにいかないで、自分のプレーができるようにしたい。（昨年22位の）賞金ランクはベスト10に入れるように頑張りたい」。まずは安定して力を発揮することを目指し、その先に優勝があると考えているようだ。（2007. 02. 15 ゴルフ）
- (21) 懐に潜り込み、左を深く差して、右前まわしもつかんだ。得意の形。しかし、これで「勝ちにいってしまった」と攻め急ぎ、土俵際で逆転の上手投げを食らった。（2015. 01. 24 相撲）

(20) は「勝つことばかりを意識して果敢に勝負に挑むのではなく、安定して自分の力を出したい」ということを、(21) は「得意の形になり、勝ちを意識して急いで攻めてしまったため、それが裏目に出て負けてしまった」ことを表している。これらの例から見えてくるのは、「勝ちに行く」の「勝利への向かい方」である。勝利を意識しすぎると、勝ち急いでしまったり、焦って自分を見失ってしまったという悪い方向へ向かうこともある。「ガツガツ」「攻め急ぐ」といった共起表現から、強い力やスピードを伴った向かい方が表現されている。これら(20)と(21)も含めて、「勝ちに行く」の意味を改めて考えると、単に「勝利を目指して向かっていく」よりも、「勝利を目指して、積極的に向かっていく」のほうが適切だと言える。

3. 3 「勝ちに行く」の移動先

本研究で収集した「勝ちに行く」（全1,668件）の用例において、具体的

⁷ 「勝ちに行かない」と「勝ち行かなければならない」などの義務を表すものは除く。

な移動先が明示されているものはわずか4件（0.2%）と非常に少ない。これも「勝ちに行く」の特徴の一つである。以下に、少数ながらも見つかった具体的な移動先が明示されている例を挙げる。

- (22) 田口は「神宮には勝ちに行く。荻野をもり立てて優勝を目指したい」。(2003. 11. 13 野球)
- (23) 「甲子園には勝ちに行く。必ず日本一に」。(2005. 03. 20 野球)

(22) は「行く」の移動先として「神宮」が明示されており、さらに取り立ての「は」が付き、「神宮球場に何をしに行くかと言えば、試合に勝つために行くのだ」ということを表している。(23) も同様に解釈できる。「神宮（球場）」「甲子園（球場）」という具体的な移動先が示されると、具体的な移動先と「勝ちに行く」の「行く」が優先的に結びつき、「具体的な移動先に、勝負するために移動する」と解釈できるようになる点が興味深い。つまり、「牛乳を買いに行く」と同じように解釈できるわけである。(22) と (23) については、次の4節でも再度取り上げる。

では、具体的な移動先が明示されていない多くの「勝ちに行く」では、どこに向かって行くのか。スポーツ選手がインタビューで次の試合に向けての意気込みを語る場面でよく見られることから、スポーツ選手が目指すところは「勝利」という抽象的な到達点であると考えられる。

3. 4 「勝ちに行く」の類似例

「勝ちに行く」と同様に「勝利を目指して、積極的に向かっていく」という意味を表す例を、スポーツ記事に絞って目視で探して行くと、(24)「勝ち点3を取りに行く」、(25)「一番いいメダルを取りに行く」、(26)「てっぺんを取りに行く」といった「～を取りに行く」の形が見つかる。これらは、勝負に関する語ということで共通し、「(試合や勝負に) 勝つ」と同様の意味を表す。

- (24) 主将を務めるMF佐藤勇人選手は1日に開かれた記者会見で「勝ち点3を取りに行く」と意気込みを語った。(2019. 03. 02 サッカー)
- (25) チーム最年長、27歳の主将は「団結して一番いいメダルを取りにいきたい」と誓っていた。(2012. 07. 29 体操)
- (26) 春高バレーで前回3位だった鹿児島商の清田一磨選手(3年)は「一戦一戦、力を発揮し、全員でてっぺんを取りに行く」と全国制覇を誓っていた。(2013. 12. 18 バレーボール)

次の(27)も「勝ちに行く」と類似の意味を持つと考えられる。(27)では「強敵を倒す」が「打ち負かす」という意味で使われている。

- (27) 中田選手は「アジア大会に出場した選手たちも戻ってくる。全員で強敵を倒しに行く」と誓い(略)(2018. 09. 01 ハンドボール)

「勝ちに行く」と類似する意味を表す上記の(24)～(27)の例には、「勝ちに行く」の文脈と同様の形式的な特徴(「全員で」などの修飾要素、「行く／行きたい」の形、具体的な移動先が明示されない)が見られる点も共通している。

4. 「牛乳を買いに行く」と「勝ちに行く」の比較

以上、「勝ちに行く」の使用実態と意味について見てきた。本節では、従来からある移動の目的を表す「牛乳を買いに行く」タイプの文(=A)と「勝ちに行く」タイプの文(=B)を比較し、相違点を指摘した後、両者の意味のつながりを考える。なお、Aタイプの文については、『現代書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の全てのデータを対象に、「[動詞]に行く」

で検索して得られた8,059件⁸から、ランダムに100件取り出したものを分析した。今回は「[動詞]に」と「行く」が隣接するパターンのみを抽出している。以下の表2は、AとBの文脈に現れた特徴をまとめたものである。

表2 「牛乳を買いに行く」と「勝ちに行く」の比較

	A「牛乳を買いに行く」タイプ	B「勝ちに行く」タイプ
共起する動詞	「遊ぶ」「見る」「会う」「食べる」「取る」「飲む」「迎える」などの動作動詞	「勝つ」に加え、「勝ち点3を取る」「メダルを取る」「敵を倒す」など勝負事に関係し、「勝つ」という意味を表すもの
移動先	「東京に遊びに行く」「ホームセンターに買いに行く」など、具体的な移動先が明示されているものは約30%	具体的な移動先は、ほぼ明示されていない
修飾要素	様々な修飾要素があり、特定のものに偏らない	「全力で」「全員で」「本気で」などが多い
「行く」の形	様々な形があり、特定の形に偏らない	「行く／行きます」という意志や「行きたい」という願望を表す形に偏る

まず、「に行く」の前に来る動詞は、Aでは前田（1995）などで指摘されていた通り、動作動詞が見られるが、その中でも「遊ぶ」と「見る」が100件中16件ずつあり、目立つ。Bでは「勝つ」の他に「勝ち点3を取る」「メダルを取る」「敵を倒す」などの勝負事に関する動詞も見つかるが、種

⁸ コーパス検索には、オンライン上で使用できる検索システム『中納言』を使用した (<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)。短単位検索モードを用い、キー「品詞：動詞」、後方共起1「書字形出現形：に」、後方共起2「語彙素：行く」で検索した。

類は限られている。

移動先については、Aは(28)の「途中駅まで」のように前の文脈に移動先が具体的に明示されているものが約30%あった。残りの約70%も文脈から移動先が大体推測できる。例えば(29)では前の文脈に移動先が明示されていないが、文脈から「劇場」であることがわかる。

(28) お休みだったおにいちゃんは、朝から電車が停まってしまって立ち往生している彼女を途中駅まで迎えに行き、会社まで送って来ました。(Yahoo!知恵袋 OY14_48548)

(29) 舞台(演劇)を観に行く予定だったのですが、急用で観に行けなくなっていました。(Yahoo!ブログ OC12_00970)

これに対し、3.3節で述べた通り、Bは具体的な移動先が示されることはほぼない。この点がAとBの大きな違いである。

さらにBは、「全力で」「全員で」「本気で」など、共起しやすい修飾要素がある。それに対しAは、特定の修飾要素との共起は見られない。例えば、「絶対」「必ず」「もちろん」など「勝ちに行く」とよく共起するものとも共起する一方で、「ゆっくり」「ふらっと」「何となく」など「勝ちに行く」とは共起しにくいものとも共起する。

「行く」の形は、Aには「行くことにした／行くね／行こうと誘ってくれた／行ったり／行ってきました／行ってみる」など様々な要素が続くが、Bは「行く／行きます」という意志や「行きたい」という願望を表す形に偏る点で、違いが見られる。

最後に、AとBの意味を比較する。新聞データから4件のみ見つかった具体的な移動先を伴う例(例えば、「神宮には勝ちに行く」)を、A・B各タイプの中間の例(=A')として置き、AからBへの意味的なつながりを見ていきたい。以下にA、A'、Bの各タイプの形式的・意味的な特徴を示す(Nは名詞、Vは動詞を表す)。

A：「コンビニに牛乳を買いに行く」タイプ

N (具体的な移動先) に/へ V (動作) に 行く (移動する)

【意味】 N (具体的な移動先) にVために移動する。

A'：「神宮には勝ちに行く」タイプ

N (具体的な移動先) に/へ V (勝負し) に 行く (移動する)

【意味】 N (具体的な移動先) に勝負するために移動する。

B：「勝ちに行く」タイプ

φ V (勝ち [転成名詞]) に 行く (向かう)

【意味】 勝利という到達点を目指して、積極的に向かっていく。

AとA'は、具体的な移動先があることと、移動後に行う動作がある点で共通しており、文全体としては「N (具体的な移動先) にVために移動する」ということを表す。一方、A'とBは、「勝ちに行く」が共通しているが、「勝ち」の部分で「勝負する」あるいは「戦う」という動作として捉えようと、Aの解釈のしかたと同じく「N (具体的な移動先) に勝負するために移動する」という意味になる (=A')。これに対し、「勝ち」の部分で「勝利」という到達点だと捉える、つまり、「勝ち」を名詞として解釈すると、抽象的ではあるがそれが「行く」の移動先と見なされ、そこから「勝利という到達点に向かう」という意味が生じる (=B) ののではないかと考える。

またBには、「勝つ」以外に「勝ち点3を取る」や「敵を倒す」といった他の動詞も入るが、到達点ということであれば「彼女と結婚しに行く」や「試験に合格しに行く」なども言えるのではないと思われる。しかし、実際にはこれらは不自然である。結婚や試験に合格することは、基本的には「勝負事」ではない。これらをあえて「勝負事」だと捉える場合は、「結婚しに行く」や「合格しに行く」ではなく、「勝ちに行く」を使った以下のような文にすれば、許容度が上がると思われる。

- (30) 【大学入試に臨む受験生が】「絶対に志望校に合格したい。今日の試験は、本気で勝ちに行く」(作例)
- (31) 【彼女の父親に結婚を反対されている人が】「ずっとお父さんに反対されていたけれど、やっと会ってもいいと言ってくれた。このチャンス、絶対に勝ちに行く」(作例)

いずれも、容易には手が届かない到達点を目指すという状況である。(30)、(31)は、「(志望校合格／結婚の許しを得ること)を目指す、積極的に向かっていく」というように理解することができるだろう⁹。一方で、3.4節にも挙げたように、スポーツの記事には「勝ちに行く」以外にも「勝ちに行く」と同様の意味を表せる別の表現も見られる。そういった例はまさに勝負事の文脈に現れているため、自然に使えるのだろう。

以上、本節ではAとBについて、共起する動詞・移動先・修飾要素・「行く」の形という観点から比較し、両者に違いがあることを確認した。加えて、AとBの意味の解釈の連続性について、「神宮には勝ちに行く」という例文を介在させながら考察した。

5. おわりに

本研究では、スポーツ選手のインタビューでよく見られる「勝ちに行く」という表現の新聞記事における使用実態を調査した。その結果、明らかにしたことを、以下に再掲する。

①「勝ちに行く」の形式的な特徴

「全力で」「全員で」「本気で」などの修飾要素を伴いやすい。「行く」の形は「行く／行きます」という意志や「行きたい」という願望を

⁹ 筆者の内省では、現在こういった表現は日常生活で耳にすることは少ないと思われる。聞いて理解はできるが、スポーツ選手のような言い方だ、と感じる人が多いのではないだろうか。

表す形に偏る。具体的な移動先はほぼ明示されない。ほとんどがスポーツのインタビュー記事に見られるが、その他にも選挙や将棋といった勝負事の記事にも使用される。

②「勝ちに行く」の意味

「勝ちに行く」は「勝利という到達点を目指して、積極的に向かっていく」という意味を表す。同じ「Vに行く」の形を持つ「牛乳を買いに行く」も「勝ちに行く」も、「ある場所への移動」を表すが、前者が具体的な場所（コンビニなど）への移動を表すのに対し、後者は「勝利という到達点」という抽象的な場所への移動を表す点で異なる。

「勝ちに行く」のような独特で新しい表現が生まれる背景には、「既存の語や表現では言い表せない気持ちを表現したい」という欲求があると思われる。「勝ちに行く」の主な使用者はスポーツ選手で、国際大会や優勝がかかった大一番の前に、選手史上（あるいはチーム史上）、最大の力を出して勝利を目指したい、と意気込みを語る場面での「決め台詞」として使用されている。ただ、この表現も多用されるようになると目新しさが薄れ、インパクトがなくなり、「普通の表現」になってしまうだろう。今後、「勝ちに行く」はどのように変化するだろうか。「勝つ」以外の動詞のバリエーションが増えるのか、スポーツ選手が意気込みを語る状況以外でも使用されるのか、あるいは全く違う表現に取って代わられるのか、今後も「勝ちに行く」の動向に注目していきたい。

参考文献

新井文人 (2016) 「日本語の『Vに行く』の統語構造と意味構造に関する一考察」『Theoretical and applied Linguistics at Kobe Shoin: トークス』19, pp.1-16.

新屋映子・姫野伴子・守屋三千代 (1999) 『日本語教科書の落とし穴』アルク.

清水由貴子

前田直子 (1995) 「スルタメ (ニ), スルヨウ (ニ), シニ, スルノニ — 目的を表す表現—」, 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下)』 くろしお出版.

『明鏡国語辞典 (第二版)』 (2010) 大修館書店.

参考資料

国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

読売新聞記事データベース 『ヨミダス』

<https://database.yomiuri.co.jp/>